

皇紀二千六百年を期する道路改良

長谷川久一

最近南歐よりの飛電は、第十二回オリンピック大會開催地として、東京市の有望なる趣を報じ來つて居る。一時は殆ど絶望せられた此の國民的要望が、ここに其の確實性を帶びるに至つたことは、わが折衝の大成功であり、且つ同時に、ムツソリニ首相が、自國の國粹を尊重すると同様の意味に於て友邦の建國記念満二千六百年を重要視する理解のいみじきに對して、絶大の敬意と感謝を表せざるを得ない。察するに現下の世界的情勢は、各國民の責務の上に、建國的意志と努力との強烈なるを要すること、いよいよ切實必至なるを思はしめる。滿洲帝國の伸展、支那最近の對日一轉機のごとき、世界各國互に共存共榮、相援引して、夫々其の歴史的認識を深めしむることに協力するのみ

要より來れるは論を俟たず、此の點が強くムソリニ首相を動かしたであらうことは、敢て否み難い所であり、此の快報に接し、國民的意義として、最も偉大なる感激と榮譽を感じずには居られない。而かもローマに略々豫定せられた如くであつた開催地が、ゆくりなくも、我が帝都と變はるに至りしに於て、特に道路改良促進の一新紀元たらしむるの好機會たるを信じて已まないのである。

抑々世界列國の都市のうちで、ローマ程政治都市、又支配の都市としての特徴を發揮じたものは、蓋し少ないのであらう。論者はよく言ふ。ローマの都は何物をも創造しないではないかと。ギリシャのアテネは、實に小さいながらも立派な世界的精神の搖籃であつた。然るにローマに至つて

は、世界的なる大帝國の首都ではあつたが、そこには何等見るに足るべき精神的所産を残してゐないのだと。その意味から言ふならば、ローマは確かに石女であつたかも知れない。併しながら東方パレスチナの一角に發生した基督教を世界的の宗教にまで之を組織的に發展せしめたのは、疑も無くローマの賜物に他ならない。凡そ幾多の聖者は、到るところの基督教の町々に生誕したであらう。しかし世界に君臨する法王は、獨りローマの地に出来上つたのであつた。そこにこの支配の町としてのローマの傳統が儼存して居ないだらうか。その意味に於てローマ教會そのものは、まさに古代ローマ帝國の後身として其の後釜にすはつてゐるのである。要するにローマは、一つの大

きな埠塲の如きものであつて、他で生れた成果を取り込み、搔き集めて、之を溶かし込み、ローマ的な綜合的結實を造り出す場所であつた。であるからローマは、強烈な意志を代表する町であつて、感情の町ではなかつた。さればこそアテネのアクロボリスには、學藝の神ミネルヴァの像が祀られたが、ローマの町の眞唯中のカピトリウムの丘上には、大神ジュピターの神が鎮座してゐたのである、ローマの世界大統一理想は、このジュピター崇拜の裡によく覗ひ得べきである。この中心地に使徒ペテロの入り來つたことは、やがて同教が世界教たるに至る素因をなすものたるは、疑を容れざる所である。ローマを出發點として、同教は十字架を高く振り翳し此の世界におし擴まつて行つた。同時に各地方に通ずる道路がつくられて行つた。道路を歩むものは半里に一度か、一里に一度は路傍の十字架に跪き一路平安を感謝し祈念するのであつた。犠牲的信仰の表徴たる十字架が先頭に立ちつつ道路はかく四方に築造されて行つたのである。

ローマの町は、到る處帝王的記念に満ちてゐる。或は新時代の階層建築の間に、屢々約二千年以前の城壁が見つけられたり、薄暗い裏店の一隅に半ば地中に埋れたミネルヴァの神殿を見出したりするのである。ローマの國家には實に幾度か消長隆替があつた。而して結局は遂に蠻族のため

に滅されてしまつたが、併しその帝王的記念は千餘年後の今日に於ても、新らしいローマの袖の間から其の姿を現はさずには居ないのである。即ち世界を征服したローマの軍隊が、鷲の旗印を陣頭に押し立てて進撃し、世界に傳道した聖徒たちが十字架を振りかざしながら教の弘通をはかつたその足跡は、二十世紀の今日に於ては道路そのものに生き残つてゐる。元來ローマ文化の特色はと云へば、外形的形式的方面に存在してゐた。而して思想的方面に於て世界に獨歩するギリシャ文化とは全く好箇の對照をなしてゐるのである。従つて支配を形式的に完備する精神が、ローマの法律政治等の上によく表はされ、その組織的具體化が取りも直ほさず。完全なる道路や水道であつた。加ふるに中世末期に及んでは、歐洲各地よりの信徒の淨財をローマに送るに當つては、法王クレメンス四世の時代には、フロレンスのブウンシニより銀行の如きが勃興し、而かも此の銀行は送金爲替に加ふるに、法王廳の財政をも一手に獨占してゐたから、その別名をラ・グラン・タボラ(大爲替銀行)

とも呼んでゐた。その後法王の交替と共に取扱銀行にも變更があつたが、矢張りその中心地は、フロレンスであり、十三世紀の初から十四世紀の終に至る間に、法王廳への納付金を取り扱ふことにより、非常な富を積むだものは、フロレンスの銀行家アシシアジユリ、ペルツチイ、メディチの三家であつたといふ。ここへ英國方面の金を送るについては、英蘭、蘇格蘭、愛蘭の納付金を一旦ロンドンに集めて、ロンドンから送ることにしてゐたため、ロンドンは遂に世界的金融市場となつた譯である。斯の如く教への道も、金融爲替の道も、交通路も、水道もみなローマの残してくれた賜物である。ローマ帝國こそとくの昔に瓦解してしまつたが、其の與へてくれた「道」は、まざまざと我々の生活のものとなつて殘つてゐる。昔のローマ人は土に化してしまつた。長き衣を身に纏ひ、足に草鞋をつけたローマの市民は、一千餘年の昔にもはや姿を消してしまつた。併し其の後裔たるムソリーニ首相の友邦に對する明朗な理解力と徹底せるステッマンシップとは、第十二回オリムピウ

ク大會を我が東京市に譲つてくれやうとしてゐるのである。記念すべき皇紀二千六百年こそは多幸なる歳である。

此の歲を以て萬國大博覽會とオリンピック大會とが併はせ開催せられんとしてゐる、併し博覽會も大會も孰れも是れ一時的のものにすぎない。ムソリニ首相の絶大なる好意に答へ、伊國民の温き友情に酬ふんが爲めには、吾人は須らく此の歲を期し道路記念祭を行ひ、道路改良の實を擧ぐると同時に改良熱を彌が上にも鼓吹すべきであらう。古き久遠の都ローマに對する吾人が責務は、文字通り實質的な舉國一致を以て其の教へを學ぶことであらう。殊にその道路文化に於て一層切實的確なる準備をととのへて、以て此の世界的寄託に副ふべきを痛感して已まないのである。

— 100・21・一一 —

雜吟

紫浪

堤長がくと橋見えず舟長閑

鶴豚に家遠ざかる丘の長閑人
昔しむかしの橋杭長閑か渡舟

漢江に布洒らす渚夏近し

行く春や耕やす人の野に丘に

麻雀にふけて悔あり暮の春

寝すごして化粧の筆に春惜しむ

退官の接木に餘念なき烟

さし木する山坊の軒に日脚かな

豆まきし烟とも見えず鳩の啼く

客や來し桑摘むに聲遠し

夕霞茶摘の娘おほろなり

新任地に菊の根分けの土の香を
慣れし路の家遠ざかる摘采人

まぼろしに人思ふ心櫻餅